

## 中国語動詞の分類試論

張, 瓊玲  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10446>

---

出版情報 : 文献探究. 18, pp.37-43, 1986-09-18. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 中国語動詞の分類試論

張瓊玲

一

文法に関する日中両国語の対照研究では、語構成・文の構成・数量表現・指示詞・格の表現形式・アスペクト・ヴォイス・モダリティなどの研究が見られる。その中の多くのものは動詞とのかかわりが極めて密接であることは言うまでもない。一たがって、それらに対照研究しようとする場合、両国語の動詞の性格が明らかにならなければならぬと思う。その一環として、本稿でとりあげようとする動詞の分類について述べると、日本語の動詞の分類については、かなり研究が進んでいると言つてよい。それに對して中国語動詞の分類に関しては、外動詞・内動詞・同動詞・助動詞に分ける方法、動態動詞と靜態動詞に分ける方法、及物動詞と不及物動詞に分ける方法などが行なわれているが、現時点では多くは意味の上から分類されている。しかし、意味による分類ではどうしても曖昧な点が残る。やはり形式から分類する方が客観性が高いのではないかと思われる。本稿では、日本語動詞の分類についての検討をばらばら指して、中国語の動詞を形式の面から分類してみたいと思う。ここで行なう分類を一つのベースとして、今後日中両国語の対照研究をさらに深く進めたいと思う。

二

文法範疇において、動詞と非常に密切な関係をもつのは、言うま

でもなく、テンスやヴォイス、アスペクトである。しかし、既知のように中国語動詞にはテンスがない。本稿では、ヴォイスとアスペクトを中心にして考察を試みることにする。

まず、資料と作業手順について説明する。今回用いた資料は、現代漢語八百詞<sup>(注4)</sup>である。その中の「動詞」の項目にある語彙、約一五五語を取り出して対象とする。

次に、受動態の「被(…られる)」、使役態の「使(…させる)」とアスペクトの「完(…終わる)」、「在(…ちようど…ている)」、「著(……ている)」、「過(……たことがある)」、「了(……た)」、「起來(……始める)」、「下去(……続ける)」などを指標として用いる。それらの文法形式と本稿で対象とする約一五五語の動詞との接統のしかたと一覽表にまとめてみよう(へ表1)。

○は言うもの。

△はある条件で言うもの、あるいは個人差があるもの(例えば、「是過(△)」では、多くのインフォーマントは言わないが、趙元任氏<sup>(注5)</sup>によると、「我從來沒是過誰的人。」の例が見られる)。

いずれも八人の中国語を母語とする留学生の内省による判断である。

E	向	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	聲	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	產	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	救	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	破	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	臨	X	X	X	X	△	○	○	○	○
F	顧	X	X	X	X	○	○	○	○	○
	為	X	X	X	X	○	○	○	○	○
	起	X	X	X	X	○	○	○	○	○
	依	X	X	X	X	○	○	○	○	○
	照	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	算	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	神	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	留	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	高	X	X	○	○	○	○	○	○	○
G	後	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	堅	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	努	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	活	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	順	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	順	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	與	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	怕	X	X	○	○	○	○	○	○	○
	勉	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	強	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	心	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	担	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	喜	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	歡	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	意	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	響	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	注	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	影	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	依	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	嫌	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	怪	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	憤	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	得	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	虧	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	犯	X	○	○	○	○	○	○	○	○
H	誤	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	躲	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	傷	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	愁	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	讓	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	氣	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	恨	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	愛	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	跟	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	替	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	留	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	停	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	等	X	○	○	○	○	○	○	○	○
	伏	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	上	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	下	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	着	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	進	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	行	○	○	○	○	○	○	○	○	○

		-完	被	起來	法	在	-著	過	使	-了
A	在	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	是	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	在	X	X	X	X	X	X	△	X	X
	於	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	於	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	於	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	於	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	能	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	例	X	X	X	X	X	X	X	X	X
	如	X	X	X	X	X	X	X	X	X
B	性	X	X	X	X	X	X	△	△	△
	歸	X	X	X	X	X	X	X	X	○
	多	X	X	X	X	X	X	X	X	○
	像	X	X	X	X	X	X	X	X	○
	如	X	X	X	X	X	X	X	X	○
	死	X	X	X	X	X	X	△	○	○
	開	X	X	X	X	X	X	X	○	○
	知	X	○	X	X	X	X	X	○	○
	願	X	X	X	X	X	X	X	○	△
C	忘	X	△	X	X	X	X	X	○	○
	忘	X	○	X	X	X	X	X	○	○
	達	X	○	X	X	X	X	X	○	○
	放	X	X	X	X	X	X	X	○	○
	慌	X	X	X	X	X	X	X	○	○
	經	X	X	X	X	X	X	X	○	○
	過	X	X	X	X	X	X	X	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
D	到	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	手	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	經	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	過	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	來	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	去	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	到	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	說	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	到	X	X	X	X	X	X	○	○	○
	有	X	X	X	X	X	△	○	○	○
	成	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	雜	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	朝	X	X	X	X	X	○	○	○	○
	田	X	X	X	X	X	○	○	○	○



「被」・「完」・「起来」・「在」・「著」・「過」・「使」・「了」などヴィニス・アスペクトに関する八つの要素に注目すると、中国語の動詞は、Aくエの九つのグループに分けられる。Aグループに属する動詞は「被」など八つの要素すべてと接続しない。それに対して、Eグループに属する動詞は、「被」をはじめ、八つの要素すべてと接続する。例えば、「息(書く)」という動詞では、

例) 被息 息完 息起(字)来 在息

息著 息過 使(他)息 息了

と言える。Hグループの動詞は、「完」に付けることができます。(例えば、「喜歡完」・「勉強完」とは言えない。)その他の要素とは接続する。Gグループでは、「被」・「完」(例えば、「被高興」や「高興完」は言わない)、Fグループでは、「被」・「完」・「起来」、Eグループでは、「被」・「完」・「起来」・「在」、Dグループでは、「被」・「完」・「起来」・「在」・「著」、Cグループは、「被」・「完」・「起来」・「在」・「著」・「過」を除いて、その他の要素と接続する。Bグループに属する動詞は、「了」しか付かない。

さて、各々のグループに属する動詞の性質を詳しくみてみよう。

Aグループの動詞は、「在」・「是」・「能説」など、動作・作用よりも状態・性質を表わす。

例) 他在家 他是学生 他能説英文

BグループはAとかなり性質が近い。「姓」・「像」・「多」など、状態を表わす動詞が多い。当然、それと関連してA・Bグループの動詞は時間の概念を含まない。「着」をつけることができないということとは、とりもなはず状態あるのは性質を表わすということとを意味するわけである。

Cグループでは、「死」・「知道」・「開始」など、金田一春彦氏の用語を拝借すれば、瞬間的な動詞が見られる。このCも「着」をつけることがない。

Dグループでは、「来」・「去」・「到」・「上」・「進」などのような移動を表わす動詞が多い。これも「在」・「著」と接続せず、動詞それ自身で進行形を表わすことができる。

Eグループの動詞「離」・「朝」・「向」・「由」など方向性を表わす動詞である。「着」と接続すれば、結果状態の意味を表わすことが多い。

Fグループは、右のEグループとかなり性質が近い。所属語彙も少ないので、あるいはEに入れるべきかとも考える。色々な可能性があることとを不意味もあって、一応ここでは下を定めておく。

Gグループでは、「高興」・「後悔」・「努力」・「堅持」など、心理作用・感情を表わす動詞が多い。

Hグループも「嫌」・「勉強」・「喜歡」・「愛」・「恨」など、心理作用・感情を表わす動詞が多い。G・Hは同じく心理・感情を表わす動詞であるが、Gに属する動詞は「事柄」しか対象にできないのに対し、Hグループに属する動詞は「事柄」も、「人間」・「動物」も対象にできる。

例) 我努力工作(〇) 我努力媽媽(×)

我喜歡工作(〇) 我喜歡媽媽(〇)

Iグループは、「用」・「吃」・「問」・「做」・「分」など、明白に動作・作用を表わす動詞が属している。それらの動詞は継続性をもつ場合が多い。「着」をつけて、動作の進行・継続を表わすことができるものと、文脈によって進行・結果の状態の両方の意味を表わすことができるものがある。

(例) 他穿着一件黑色大衣(結果状態)。  
他正穿着衣服・準備出門(進行)。

多くの動詞はこのグループに属す。

以上の考察をまとめて、各々のグループに一心の名林を附けたいと思ふ。但し、その適否についてはお熟慮を必要とする。

AグループとBグループにおける動詞の性質・連接形式は極めて似ているので、ここで、Aを「性質・状態動詞I」・Bを「性質・状態II」と呼んでおこう。

Cグループを「瞬間動詞」と呼ぼう。

Dグループを「移動動詞」・Eグループを「方向動詞」と呼んでおこう。D・Eグループは場所・方向と関わりがあるという点で似ているが、DとEの大きな違いは、Eグループには「介詞」の性質をもつ動詞が少なくないという点である。これはDグループの動詞にはない性質である。例えば、「朝東」は言えるのに対し、「東」は言えない。

FグループとHグループをそれぞれ「感情動詞I」・「感情動詞II」と呼ぶこととする。両者の相違点については、既述のとおりである。しかし、両者の最も大きな違いは、「被」と接続するかどうかであると言えらる。これも連接する目的語の問題ともからんできやうである。今後なお検討が必要と思われる。

Gグループを「はらう」・「動作動詞」と呼んでおこう。これとさうに下位分類できるかも知れない。これもまた今後の課題である。

#### 四

以上のように分類した動詞の各々のグループは、例えば、副詞・接続詞・介詞など他の語と連接する場合、その連接のしかたにそれだけ差違が見られる。次に、それらの点について述べてみよう。

まず、程度副詞「很(とても)」、「非常(非常に)」、「更(さらに)」、「など」を連接する場合を見てみる。これらの連接状況はほぼ同様であるから、ここでは「很」を代表として扱うことにする。「很」はG・Hグループの動詞には付きやらず、

(例) 很努力工作。 很喜歡工作。

それから、Bグループの中、「像」、「多」だけを修飾する。一方、A・C・D・E・F・Iなどのグループの動詞は修飾しない。程度副詞「很」は、当然のことながら、やはり程度の表われる動詞を修飾するわけであろう。それゆえ、「很」等はG・Hグループの感情動詞を修飾することになる。

次に、副詞「再(また・かさねて)」、「又(また・かさねて)」の場合。日本語では同じく「また」あるいは「かさねて」と翻されるが、中国語では「再」は二度目(以上)の動作が未然であるときに用いられ、「又」は二度目(以上)の動作が既に行なわれたときに用いられるというように、用法に明らかな違いがある。したがって、「又」はAからIまでのグループを皆修飾できるのに対し、「再」はA・B・Cグループは修飾しない。

接続詞の「一面……一面……」(「……しながら、……する」)は、性質の異なる動作を並行して行うことを表わすのが原則である。A(「H」)は連接せず、Eに所属する動詞には殆ど連接することができらる。

(例) 一面説話一面看報。

中国語の否定形は、一般的には「不」であるいは「没有」で表わす。「不」は殆どの動詞と連接するが、「没有」の場合はAグループとは連接せず、Bグループの動詞にも連接しにくい。「没有」はA・B以外のグループすべてと連接する。

命令句について見てみると、A・Bグループでは命令句が成立しないが、その他のグループでは成立する。

「重畳」とは同じ動詞を重ねること、短い間に軽々しく動作作用をする、試みに動作・作用をするなどの意味を表わすことであり、中国語の語構成の特徴の一つである。Eグループの大部分・Fグループの多くの動詞に可能である。

【例】 玩玩。 教教他。 吃吃看。

最後に、動作・作用の行なわれる場所・時間・状況を表わす介詞「在」で……において」の場合を見てみよう。この介詞は、A〜Fには付かない。G・Hグループの動詞には付くが、不自然な場合も見られる。GとHとは心理作用的な動詞であるから、もし「在」が付けば、「在」の後に具体的な場所名よりも「心裡」・「腦裡」・「嘴裡」のような抽象的な場を表わす語が付くことが多い。例えば、「愛在心裡」。「在」はEグループの半数の動詞には付くが、半数の動詞には付く。EグループとDグループの対立はその「在」の接続のしかたによって一層明瞭に表われる。Eグループの動詞には、その後に場所を述べ語を付けることができるものがないものがある。もし付けば、その間に必ず「在」が要るのに対し、Dグループでは「在」は要らず、直接動詞の後に付くことになる。

【例】 寫在紙上。 住在福州。  
采這裡。 去東京。

との対立である。又、Eグループにおおして、「在」が付けられる動詞は「給」(ミに)「し」という介詞も付けることができる。一方、「在」が付けられないものは「給」も付けられないという傾向が見られる。以上述べてきたことを整理してみると、へ表4Vを得ることができ

へ表4V

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
很……	-	+	-	-	-	-	+	+	-
面……面	-	-	-	-	-	-	-	-	+
在……在	-	-	-	-	-	-	+	+	+
重畳	-	-	-	-	-	-	+	+	+
再……	-	-	-	+	+	+	+	+	+
命令句	-	-	+	+	+	+	+	+	+
没有……	-	-	+	+	+	+	+	+	+
又……	+	+	+	+	+	+	+	+	+
不……	+	+	+	+	+	+	+	+	+

十は多くの動詞に可能であると認められるもの。  
一は多くの動詞に不可能であると認められるもの。  
十は可能なものと不可能なものがあるが相半ばするという意。

五

客観性・明解を期して形式面から中国語動詞を分類してみたが、各々のグループの性質について、ある程度明らかになったと思う。最後に、全体的な視野に立って、もう少し考察を加えてみよう。

中国語動詞は自動詞・他動詞に両用できるものが多いので、自他の判断が難しい。それで、本稿でははじめから自他の分類をすることをやめた。しかし、へ表4Vを見ると、A〜Iの中、上のグループほど自動詞が強いのに対し、下に下がるほど他動詞が強くなる傾向が著しい。この傾向は、奥村三雄氏による日本語動詞の分類にも同じように見られたものである。<sup>(注9)</sup>又、アスペクト形式についても上の方が付きにくく、下のグループほど付きやすい。受動態も

同じく上の方が作りにくく、下の方が作りやすいという傾向が見られる。一方、ウイイスに関しては受動態よりも使役態が成立しやすいことが一目瞭然である。この点も日本語の受身・使役それぞれの形式と動詞の連接する状況に似ていると思う。

以上、形式の面から中国語の動詞を分類してみたが、現時点ではまだ試論の域を出ないと言わざるを得ない。諸賢の御批正を切に願う。

注

注1: 寺村秀夫氏 「日本語教育における動詞の問題」 日本語教育 47号(1992・6)

高橋太郎氏 「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」

『日本語動詞のアスペクト』(1996) ちくま書房

注2: 黎燕氏 『国語文法』(1969) 台湾商務印書館

周運明氏 『国文比較文法』(1948) 正中書局

趙元任氏著・丁邦新訳 『中国語的文法』(1980) 台湾学生書局

注3: 中国語のウイイスの形式としては、「使」・「叫」・「讓」・「被」などがあるが、ここでは「使」・「被」と主として扱う。

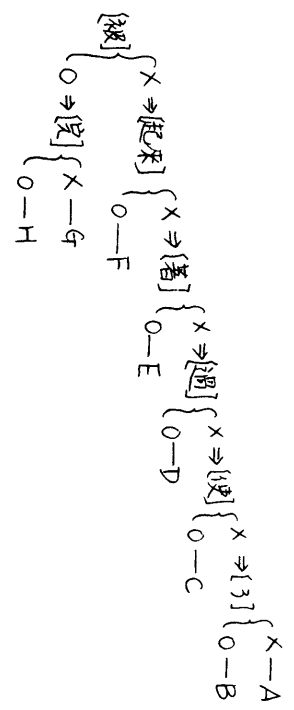
注4: 呂叔湘氏 (1984) 商務印書館

注5: 『中国語的文法』 三九五九ページ

注6: 「起來」・「下去」と動詞との連接状況はほぼ同じであるので、ここでは「起來」のみを代表として用いる。

注7: 『日本語動詞のアスペクト』

注8: Eグループに入れば、△表△Vの分類は次のようになる。



注9: これは未発表である。

参考文献

金田一春彦氏 『日本語動詞のアスペクト』 ちくま書房

寺村秀夫氏 『日本語のシンタクスと意味』(1982) くろしお出版

奥村三雄氏

「日本語動詞の分類」(但し、この題名は張が私に付したものである。) プリント。

〔付記〕 △表△Vは筆者のほか鄭兆宏氏・林惠美氏・夏島氏・陳麗氏・黄岷有氏・黄瓊慧氏・盧月珠氏の調査に基づく。本稿は以上の方々のご協力により、成ったが、本稿の主旨に関しては全面的に筆者の責任によるものである。諸氏のご協力に心より感謝申し上げます。

九州大学大学院博士課程